

区民の主体性が 魅力ある世田谷を育む

誰もが住みたい、安全・安心のまちづくり



世田谷区長

熊本哲之さん

くまもと のりゆき●1931年広島県生まれ。中央大学法学部卒業。1977年、東京都議会議員に初当選（連続6期）。1988年、新都市庁舎建設特別委員会委員長に就任。1995年、地方分権推進特別委員会委員長に就任。同年、東京都議会議員に就任（～1997年）。2003年、世田谷区長初当選。現在2期目を務める

区民の生命と財産を守る

高橋―私は日本人にとって、戦争責任、反戦の問題は普遍的なテーマだと思っていたのですが、最近、これは世代限定のテーマなのではないかと感じています。先の戦争を実際に体験したのは、1911年（明治44年）から1925年（大正14年）に生まれた人々です。前者は満州事変のあった1931年に、後者は終戦の1945年に20歳になりましたから、本当の意味で戦争を体験しています。次の昭和一桁生まれは勤労動員として、昭和10年代生まれは国民学校で戦争を体験しました。この世代までが反戦を実感として理解できます。しかし、これから戦争を体験した世代が少なくなると、戦争の問題自体を問う人がいなくなります。

熊本―戦争だけは絶対に繰り返してはいけません。そのためにも、戦争の記憶は風化させないように言い伝えていくことが大切です。私は広島生まれですが、戦時中は学徒動員で呉工廠くまがたにいて、そこで原爆を見ました。母方の祖父は住職で、お盆の檀家まわりをしていて原爆にやられました。父親はその日、広島駅にいて原爆に遭いました。駅の外にいた人はみなやられたのですが、幸い父は建物の下敷きになりましたが助け出されて無事でした。

高橋―そういう意味では、区長さんの世代までが、本当の意味で「区民の生命と財産を守る」という問題を

業体験をさせているそうです。なかには体や心に問題を抱えた子もいるのですが、植物が成長するプロセスを見ると、見違えるように元気になるのがわかるそうです。

熊本―子どもたちには命の大切さを学んでもらいたいと思います。実際に自分で生き物を育てると、命の大切さがわかるのです。世田谷区は、群馬県川場村と協力して「健康村づくり」を進めており、子どもたちの自然体験など、さまざまな交流事業を行っています。そこで自然や命の大切さを学んだ子どもたちは、世田谷の緑を大事に守っていかれると思います。

すべての人が安全・快適に暮らせるまちづくり

高橋―治安の問題についてはいかがですか。

熊本―区長になった夏に警視庁の統計資料を見せられたのですが、驚きました。世田谷区の空き巣被害が都内でワースト1だったのです。それで、区においても「24時間安全・安心パトロール」を開始し、警察署や区民防犯団体等にもご協力いただき取り組みを進めた結果、区長になる前の2002年と昨年を比較しますと刑法犯認知件数は約17%減少しています。

高橋―そうした地域住民の参加意識や感度の高さも世田谷の特徴ですね。

熊本―世田谷には現在、310のNPO法人が事務所を構えています。これからのまちづくりは、行政だけでなくできるものではなく、区民や事業者の方々の連携が非常に大切になります。区民や事業者が主体的に参加できる環境整備を積極的に推進し、魅力と活力にあふれた地域社会を実現していきたいと思っています。

語ることができるといいます。区長の経験を聞く、どうして区長が区民の生命と財産を守ることを強調されるのかわかります。

熊本―戦争の経験もあります。私が区長に就任した前の年に、北朝鮮が公式に日本人の拉致を認めました。そのときに、国民の命を守るのが国家で、国民を守らない国は国家とは言えないと思いました。それが区民の生命、財産を守るといふ私の方針につながっているのです。

都会の農地を守り伝える

高橋―世田谷は自然が多く残り、文化施設も充実しており、素晴らしい住環境を備えています。これからの課題についてはいかがでしょう。

熊本―私は都議会議員を22年務めました。そのとき多くの都民の方から「一度は世田谷に住みたい」という声を耳にし、それをついに誇りに思っておりました。区長になってからは、区民の生命と財産を守ることを区政の最優先課題に掲げ、「安全・安心のまちづくり」を基本にさまざまな施策に取り組んでいます。

具体的には、①東京で一番子育てしやすいまちをめざす子育て支援の充実 ②高齢者退院対策など福祉施策の充実 ③子どもたちを地域社会で見守り育てる教育の充実 ④暮らしやすいユニバーサルデザインのまちづくりやみどり率33%をめざしたみどり共生する快適なまちづくり ⑤「スポーツの世田谷」をめざした健康ではつらつと暮らせるまちづくり ⑥区民が主役のまちづくり ⑦行政改革などの施策を推進していきます。

高橋潤二郎さん
慶應義塾大学名誉教授、アカデミーヒルズ顧問

たかはし じゅんじろう●1936年生まれ。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。1975年慶應義塾大学経済学部教授、1990年同環境情報学部教授、1993年慶應義塾常任理事、2001年より現職。専門は計量地理学、地域政策、コミュニケーション論、GIS(地理的情報システム)など。おもな著書に『抽象的地表の原理―地理学の理論化への挑戦―』などがある

高橋―もう一方で、地域の事業者の方々の理解と協力も重要です。

熊本―前の成城出張所の所長さんは非常に熱心で、防犯カメラの設置率を高めるために、自ら管内の事業者をまわってお願いをされたようです。防犯カメラのメーカーにはリース料を半額にしてくれるよう交渉し、その代わりメーカーは非課税にするよう税務署に掛け合いました。現在、成城管内だけで約420箇所に防犯カメラが設置され、これが犯人逮捕にも結び付いています。防犯カメラの設置には予算が必要ですが、区民の生命・財産を守るためにも必要なことですから、必ず実現したいと考えています。

高橋―今回、安全・安心のまちづくりの延長として、「ユニバーサルデザイン推進条例」を施行されましたね。

熊本―区民が安全・安心に暮らすには「どこでも、誰でも、自由に、使いやすい」というユニバーサルデザインのまちづくりが必要です。特に、高齢の方々は足場が悪いと、家に閉じこもって外に出なくなり、病気になるがちです。

世田谷区では「生涯現役」を謳っており、これまでも「福祉のいえ・まち推進条例」で、高齢者や障がいのある人を含むすべての人が安全・快適に暮らせる環境整備を進めてきました。今回は従来のハード面に加え、さらに情報やサービスの面からも取り組みを推進させようということで、「ユニバーサルデザイン推進条例」の施行につながりました。

ユニバーサルデザインのまちづくりを推進し、すべての人が個人として尊重され、ともに支え合い、安全で安心して快適に住みつづけることができる世田谷を実現していきたいと思っています。



等々力渓谷

ただけるまちづくりを進めたいと思います。すべてをただ近代化すればいいのではなく、古き良きものを活かしつつ、いかに新しいものと融合させていくか。これからは、そうした考え方が大切になるのではないのでしょうか。

武蔵野の自然を守り、育てる

高橋―世田谷区はコミュニティとして非常に成熟し、安定していますが、道路や下水道、河川などの都市基盤については、総点検が必要な時期にきているのではないのでしょうか。

熊本―世田谷の人口は2035年には約89万人になると予想されていますが、施設や設備は現状のままで大丈夫なのか。それが一番の心配の種です。これまでの行政は問題が起きてから対応する「対症療法型」でしたが、世田谷区は問題が起きる前に手を打つ「予防型」の行政をめざしています。社会が成熟し、安全・安心な暮らしの価値が高まっている今は、予防型の行政が求められているのだと思います。



子育て家庭の支援のために多機能型子育て支援施設「子育てステーション」を開設した



区民も参加する防犯パトロール



世田谷246ハーフマラソン



世田谷文学館



国分寺崖線

地域の個性を活かす

高橋―世田谷のまちの特色のひとつに、センターレス、中心がないということがあります。都心から放射状に延びる鉄道と246号線をはじめとする道路、そして環状線があり、5つの行政区に分かれています。これはローカル・コミュニティとして、非常にもしろい可能性を秘めていると思います。

熊本―世田谷区の人口は84万人で、県と同じ規模の人口を擁しており、5地域の支所を中心にきめ細かな行政サービスを展開しています。私が選挙公約で掲げた政策のひとつに、南北に走る循環バスの整備があります。一昨年には祖師谷・成城地区で、今年は二子玉川駅と喜多見・伊奈根地区とを結ぶルートで循環バスが運行を開始し、高齢の方たちに非常に喜ばれています。引き続き、公共交通不便地域の解消や利用者の利便性向上に向け、路線の開設などに取り組んでいきます。

高橋―これからの行政のあり方を考えると、NPOの人々の力を活かし、住民が主体的に参画できるまちづくりが必要です。大きな地域中心にすべての機能を集約するのでなく、それぞれの地域の特色を活かしつつ、お互いをネットワークで補完する地域づくりが求められているのではないのでしょうか。世田谷には、ミュージアムや駅、公園、通りなど、そうした地域づくりのために必要な要素はすべてそろっていますね。

熊本―歴代の区長さんのご功績もあり、世田谷には素晴らしい環境や資源が残っています。豊かな自然と高級住宅街、商店街、下町の風情があるまちが混在し、加えて文化があります。そうした多様な要素をうまくミックスしながら、区民に住んでよかったと言ってい

現在、東京都では1時間50mmの集中豪雨に対応するために、河川や下水道を整備しています。世田谷区でも、以前より雨水浸透施設や貯留施設などの雨水流出抑制施設の整備を進めてきましたが、これから人口がさらに増加したときや集中豪雨に備え、より一層、都市型水害対策を拡充するよう準備を進めています。また、今後発生が予想される首都直下型地震による住宅や建築物の被害を未然に防ぐために、「耐震改修促進計画」をつくりました。国の耐震化率の目標は90%ですが、世田谷は住宅都市ですから95%をめざし、耐震化を促進していきたいと思っています。

高橋―最後に今後の展望についてうかがえますか。熊本―前区長の長場さんは、多くの文化施設を整備して「文化の世田谷」を全国にアピールしました。私はその伝統を踏襲しながら、新たに「スポーツの世田谷」を推進したいと考えています。

昨年、区制施行75周年を記念して「世田谷246ハーフマラソン」を開催しました。駒沢公園をスタートし、国道246号線から多摩川の河川敷まで秋の世田谷を走るコースです。今年11月18日に開催しますが、警察署の理解・協力もあって公道利用を拡大します。ゴールは駒沢オリンピック競技場になり、100名の方が参加する予定です。

また、世田谷のみどり率は現在25・56%ですが、区政100周年を迎える2032年までに33%まで引き上げたいと考えています。緑をなくすのは簡単ですが、増やすのは大変です。区民のなかにも積極的に緑化に取り組み方が増えていますから、区民と一体となって武蔵野の面影を残す自然環境豊かな世田谷を守り、育てていきたいと思っています。